◎横浜の芸術文化への提言

①横浜ルネッサンスに向けて

■平岡正明

①横浜ルネッサンスに向けて
②横浜の芸術文化行政の歩みと今後の取り組み

1―オルガナイザーは夢見る不良中年がいい
2―個人主義とピンポイントの輝き
3―場末美の自由
4―夜の薄さの中の文化創出について
5―文化は飲む、うつ、買うで磨く
6―在日に学べ
7―反東京をかかげるかどうか
8―中華街
9―ボランティア活動とパニック

横浜に住んで六年半になった。最初の二年間は結集環が見つからなかった。三年目に野毛大道芸を知った。横浜に芸術運動のいろんな芽を感じ「横浜ルネッサンス」と名づけていたものが、大道芸に核を見出したというのは自分でも意外だった。その総括と展望を『横浜的』『大道芸および場末の自由』に記したので、その次の段階でやるべき手だてを本稿で考える。

1―オルガナイザーは夢見る不良中年がいい

丸尾長顕ストリップ文化というものがあった。葛井欣四郎新宿アングラ文化というものがあった。酒井五郎ピットイン文化というものがあった。丸尾長顕はフランス文学者。艶笑コントの名手だったが、それ以上に日劇ミュージックホールのオルガナイザーだった。全盛時、踊り子トップはジプシー・ローズ、歌手は高英男、ヴォードビリアンはトニー谷、ギタリストは深沢七郎、照明は団鬼六というラインアップを見るだけで、ストリップ文化の黄金時代だったことがわかる。舞台内容は欧米の一流どころナイトクラブに張りあった。

葛井欣四郎はアートシアター「新宿文化」と地下の小劇場「蝎座」の支配人。若松孝二・大和屋竺・足立正生のピンク映画の上映、浅川マキの小コンサート連続、大島渚『儀式』をめぐる徹夜討論会などをやった。

酒井五郎は「新宿ピットイン」のマネージャー。山下洋輔・武田和命・富樫雅彦らによる日本ジャズ革命はこの店を拠点にして起り、大麻所持容疑で日本にとどめおかれたエルヴィン・ジョーンズを援助したのも彼だ。彼は仁侠道の人であり、彼の世話になった海外ジャズメンからの信頼は絶大である。

ここに名を出した芸術家たちは今では知らぬ人もいないビッグネームであるが、丸尾、葛井、酒井氏らオルガナイザーの値打ちは、若く貧しく無名時代の才能をマスコミやレコード会社よりずっと前に発見し育てたことである。一、飯を食わせる。二、表現の場をあたえる。三、世に出るチャンスがあれば放してやり独占しない。自分は黒子でいい。これが夢見る不良中年のいいところだ。

野毛大道芸には「萬里」主人福田豊がいる。オルガナイザーにはなぜ夢見る中年がいいかといえば自分がウケたいという野心を持たないからであり、福田豊は芸能界人種でさえない。横浜は商人がいい。各町にいい商人がい

る。中区には本牧、中華街、元町、関内、ザキ、福富町と個性的な町が揃う。各町に一人、福田豊型のオルガナイザーが出てくれば横浜はだいじょうぶだ。

町・芸人・観客が対等。芸人は投げ銭で勝負し、観客は投げ銭で参加する。肉声肉眼肉体で表現し、チープな道具立てとチープなアイデアを高度な技術で実現し、観客に周囲三六〇度をかこまれて演じる大道芸人たちの自由のために、ボランティア活動家は軍隊化する等の野毛方式の大綱は福田豊がつくったものである。

行政はそのようなオルガナイザーをつくりだすことはできない。行政にお願いしたいことは文化活動に際して識者の意見よりオルガナイザーの意見に耳を傾けることである。

2―個人主義とピンポイントの輝き

野毛のいいところはまず野毛を考えることだ。横浜の文化シンポジウムに出席すると異和感をいつも感じる。みんな横浜のことを考えている。それではだめなのではないか。自分を考える。自分がいい数字を残すことがチームの勝ちにつながる、という考えかたが正しいのではないか。よい例をあげる。

北原人形館北原照久の主催するおもちゃ学会の討議はたいへんに内容のあるものだ。天下国家に関係のないおもちゃを大の大人が愛しているからだ。だから全国的な内容水準をもっている。

横浜ジャズ協会が吉田衛追悼コンサートをやる。成功するだろう。故吉田衛氏は市文化功労者だが、「ちぐさ」という小さなジャズ喫茶のおやじさんである。ジャズ協会は市内のジャズ・スポット各店を結んで数日間横浜をジャズの町にしようという「ジャズ・プロムナード」を三年前からはじめていて、なかなかの活躍ぶりであるが、ジャズ喫茶のおやじさん一人を追悼するコンサートのほうが全国的な動員力を持っているという答が出るかもしれない。ジャズの人情に叶っているからだ。

野毛のB級タウン誌『ハマ野毛』の執筆者とこの町の主催するシンポジウムのパネラーは、市でも集められないメンバーといわれた。逆である。市では集められないのだ。

以上三つの例はピンポイントを鮮明にしているから成功した（吉田衛追悼演奏はするだろう）例であり、芸術活動の理に叶っている例である。

芸人・芸術家・思想家という人種は＜おれ対世界＞だ。＜内部対外部＞でもよい。その外部はどこでもよい。隣り三軒だろうとパレスチナだろうと東京だろうと同じだ。「内部」のほうは、豪邸に住もうと一間だけの部屋に住もうと、坐って半畳、寝て一畳、死んで骨壷の中でいい。丁目より町、町より区、区より市……のほうが大きな単位であり、決定力の大きい単位であるという行政単位の発想はまるでない。したがって興味あるテーマを持ったピンポイントが活況を呈する。

3―場末美の自由

中心には文化は生れない。オフィス街・官庁街・金融街には夜間人口がなく、追剥ぎも商売にならないさびしさだから文化活動どころではなく、また文化をもちこむべきではないだろう。健全な産業社会の夜はさびしいものだ。

米海兵隊の強さは軍隊に文化を持ちこまないことにあるといわれる。文化は兵隊を弱くする。そのかわりオフには兵隊を自由にする。その落差がひどすぎると今回の沖縄の事件のようなことになる。

皮肉ではなく産業社会中枢の半端な「文化」は気色の悪いものだ。金融機関の猫なで声、企業のキレイキレイ主義、官僚の厚化粧がそれだ。自由は場末にお任せあれ。

町が場末美に達し、横町がぶあついことは社会が健康である証拠だ。場末が場末美に達するには人の半生くらいかかる。使いこまれ、磨きこまれて場末美はでてくるものであって、横浜にはハマ風に磨きこまれたいい町がたくさんある。詳しくないので町名を出すのはもうすこし通ってからにしよう。

東京に多いケースだが、つくられた下町がある。一歩足をふみいれただけで人情を感じさせるようなところは、二時間もいればくどくて飽きがくる。ほんとうの下町のよさは、ほうっておいてくれることである。近時、他人をほうっておいてくれるよさを感じた都会は北京と上海である。

4―夜の薄さの中の文化創出について

気づくのがおそかったかなと思っているのは、深夜営業のファストフード・チェーンと

コンビニ店のよさだ。味も接客態度も雰囲気も画一的である、個人商店を圧迫する、商売の区分をごちゃまぜにするという批判はなりたつが、では都会の夜になにがあるか。

終電後の横浜駅ー保土ケ谷駅間を歩いて帰ることがある。ドーナツ店、ハンバーガー店、ゲームセンター、レンタルビデオ店、深夜十二時まで営業している古本屋、カラオケスタジオ、そして五百メートルに一軒はコンビニ店がある。入ると、若い連中が所在なさそうな顔で料理をつまんだり、シェークのストローで紙コップをつついている。暗いが、絶望的な表情ではない。コンビニ店の前では中学生か高校生が、ウンコずわりしてカップ麺を食べたり漫画を読んでいたりする。これも暗いが絶望的な顔ではない。

それら若い連中の顔は、赤提灯をくぐったり夜鳴きソバ屋台に頭をつっこんだり（横浜は屋台が少ない）する年配の客とも、街道のトンコツラーメン屋に入る深夜タクシーと長距離トラッカーとも、不夜城化した福富町で一夜の歓楽を買う人々（風俗店は産業社会の端末である）ともあきらかにちがう。

深夜のドーナツ屋に入り、内容空疎な音楽を耳にいれながら、ドーナツをつまむのも「いい」ものだ。都会生活者のやるせなさがわかる。

かれらは終電がなくなったから帰れないのではない。店の前には原チャリが停めてあるから。深夜営業のコンビニやファストフード店はかれらの薄い夜のオアシスのようだ。かれらに対応する芸・芸術・思想はまだないのではないか。

図書館、劇場、市民センターはせいぜい夜九時までの文化である。これはしかたがない。管理人は家に帰らなければならない。アダルトにはそのあと個人的に夜を濃縮する数時間があるが、若い連中の薄まった夜は、もっぱら所在なさがただよっているだけなのではなかろうか。どうすればいいかという方針はわからない。

5ー文化は飲む、うつ、買うで磨く

多くの友人たちを見てきたが、力士がチャンコで大きくなり、稽古でしめ、日本酒で肌のつやを出すように、人間が味を出すには飲む打つ買うが正しいやりかたであった。だらしなさの快楽とルーズさへの寛容がなければならない。山本周五郎宅の大家であった婦人いわく、文豪は毎晩飲んでご帰館になっては庭の椿に小便をかけた、ために椿は枯れてしまった、文学者は店子としては歓迎すべからざるものであるけれども、作品創出に向かっての燃焼を見るにつけ、文化とはきれいごとではないということをつくづく教えられた、と。

行政はアマチュアの芸術活動のために劇場をつくったり便宜をあたえたり指導することを文化行政とみなしがちである。そのほうが民主的な感じがするし、目に見える答が出やすいからだが、アマチュアはそれで飯を食っていないので甘さがある。人々がプロを尊敬し、プロを自分たちの代表選手として応援するようにもっていくのが文化政策である。

お手玉師水野雅広は横浜市一の観客動員力をもつ芸術家である。彼が夜の山下公園氷川丸わきで演じるジャグリングは港の夜景に親和力をもって、人々を楽しませていた。しかるに彼は公園で演じる許可を得られないのである。

開港以来百五十年、横浜ですばらしい芸術芸能の芽が生れた。それがほとんどすべて東京に持ってゆかれた理由は、経済力だけではなく、横浜の甘さである。芸人、芸術家は勝負をしたいのである。作家は作家と勝負をし、芸人は芸人と勝負する。勝負の桧舞台というものがある。それが横浜にはない。だから桧舞台めざして逸材が出ていってしまうのである。

横浜の文化活動を見ていると、文化をムードとみなし、軟弱なものとみなす傾向がある。桧舞台をつくれ。横浜をドサ廻りだと思っている「アーチスト」は入れないという見識が必要である。

なお、軟派と軟弱はちがう。飲む打つ買うでふにゃふにゃになる人は最初からダメな人だ。競走と批判がそれを決する。また桧舞台というのは抽象語ではない。野毛大道芸は世界の大道芸の桧舞台の一つである。野毛につづけ。

6ー在日に学べ

日本人には芸能芸術は娯楽でいいだろう。芸能芸術の創出を闘いとして行っているものが在日朝鮮人、韓国人、中国人である。文化創出によって主体性（アイデンティティ）を確立するという方法が、過去五年ほど、在日の人々のあいだに、くっ

きりとした方針になってきた。これこそが真の日本の国際化である。俺の知るかぎり在日の芸術的精鋭は横浜が好きである。迎えよう。かれらの厳しさに学ぶことが多々あり、かつ、遠からずかれらが都会文化の支柱になる日がくると思っている。

7―反東京をかかげるかどうか

東京には勝てないが、負けないやりかたがある。本牧ジャズ祭の初期に反東京ジャズ祭をかかげてはどうかという意見を出したことがあったが、これは採られなかった。東京のジャズファンを敵にまわす必要はないからで、そりゃそのとおりだ。

東京は日本という国の中にあるもう一つ別の国の如しだ。金融、財政、官庁、交通、情報の中央集権であり、ことにメディア（マスコミ）において一極集中もここにきわまる。部数百万部の少年週刊漫画誌を発行する出版社が何社もあるような都会は、日本はおろか世界中を探してもない。

勝てないが、負けない条件は横浜にある。

港町は対岸の港に面して国際的であり、物資を内陸に運ぶ川に沿って階級的であり、潮風が丘にあたって生じる霧によって民族的である（あった）。

国際性と民族性と階級性の交点という港町の特性によって横浜には東京に負けない条件がある。

なぜ毎夏、週末になると房総に百万、湘南に百万という民族移動規模で首都圏住民が出てゆくのか。湾岸がコンクリートで固められ、自然の海がなく、心まで蒸し焼きにされそうになるからだ。

なぜ雑誌の横浜特集が定番になっているのか。横浜が東京の幻想都市だからである。中華街の賑いは東京人口誘引による。これらの現象は、絵に描いたような横浜のステロタイプを提出することによってもたらされたが、今後はそうも行かなくなるだろう。

8―中華街

港町は対面する外国の港のイメージを失ってはならない。かつてはロンドンでありシスコであり上海だった。船の時代から飛行機の時代になって横浜はだいぶ対岸のイメージを失ったが、しかし中華街がある。横浜華僑が広東系主体であることもあって横浜中華街の対岸のイメージは香港だと思うけれども、碁盤の目状の横浜中心部に菱型にうめこまれた中華街の異国情緒は威力抜群である。

中華街は食の中国文化から、文字の中国文化に進む可能性がないか。香港は一九九七年の中国返還に応じて、映画（桧舞台に集中して一点突破するやりかたの見本）から一挙に文字の文化に舵をとるのではないかという気がする。横浜市民は一九九七年の香港に注目すべきである。

中華街は中国の地方都市を一つ買うくらいのことをしてもいいのではないか。中国の沿岸都市は古いものを平然と破壊し、超高層をつくる。その古材を買って、港ヨコハマの中心部にポコンと一つ、古い中国の町を再現したら面白いと思うのだ。

9―ボランティア活動とパニック

ボランティア活動のいかんが命の問題だということが阪神大震災でわかった。

横浜のボランティア活動家は強力だと思う。野毛大道芸、本牧ジャズ祭、SAYネットワークと横浜AIDS塾に加わった知見で言うと、SAYネットワークは市衛生局と組んで活動しているために気づきにくいけれども、市民活動の新展開であり文化活動でもある。

ボランティア活動と生命の問題は五月の野毛大道芸祭でも起きている。本年五月の野毛大道芸はオウム事件のただ中で開催された。影におびえて自分たちの祭をやめるわけにはいかない。市民をなめるな。

イベントと祭のちがいがある。魂の領域でやるのが祭だ。夜中の三時まで対策を協議した町のリーダーたちと、実行したボランティア助勢者の人間力がすばらしい。この力が文化である。もうちょいだ、フルパワーを出せるのは。

〈評論家〉